

### Ⅲ 研究内容の概要

#### 1. 研究主題設定の理由

##### (1) 幼・小・中をつなぐ教育

生活、経済、政治など、あらゆる分野で情報化、グローバル化、消費生活化が進んでいる。一方で、子どもたちの様々な問題が顕在化している。基礎的な生活習慣の変化に起因する対応の複雑化、自治力の弱さ、学年があがるにつれての学習意欲の差の広がりなど教育の課題は山積している。本校園では平成9年～12年に小学校と中学校が（以下「H9小・中連携研究」）を行い、教育内容の組み換えや総合的な学習の開発を行った。平成13年～15年には幼稚園と小学校が「幼・小連携の教育課程」の開発（以下、「H13幼・小連携研究」）を行い、幼・小接続期カリキュラム開発や教科等の再編成を行った。約10年にわたるそれぞれの研究成果をふりかえるとき、これからはさらに幼・小・中12年間の発達を連続して見通し、接続期を焦点に適時性に配慮したカリキュラム開発の必要性が問われた。

##### (2) めざす子ども像の共有

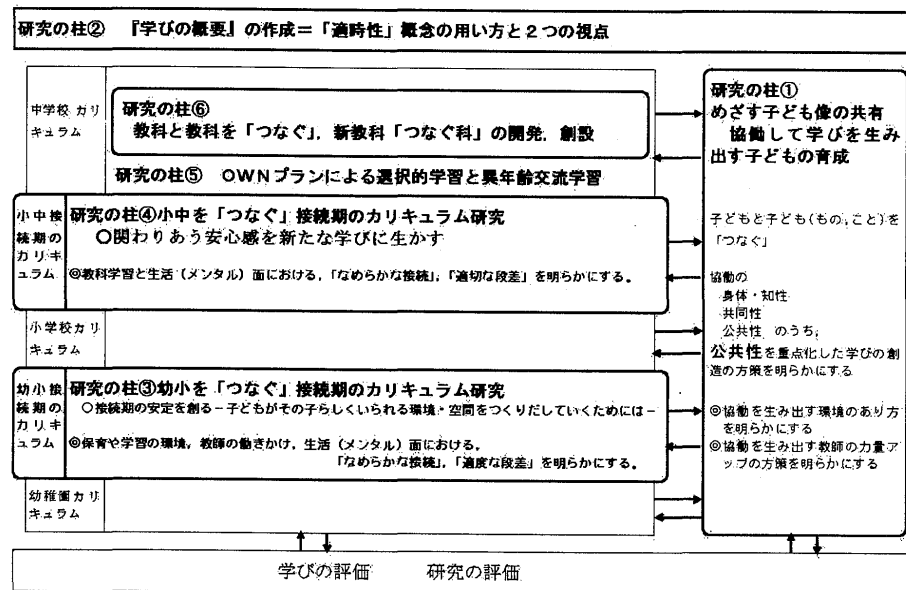
幼・小・中・高が大学の敷地内に隣接するメリットを生かし、本研究を始めるにあたり、幼稚園から高校までの全教員を対象に、現在の子どもたちをどうとらえ、これからの時代に必要な力は何かとアンケート調査をした。その結果から、他者理解・適切な判断力・協調性と行動力など、人やものごととのアクティブで創造的な関わりに類するキーワードを多くの教員が挙げている。そこで、めざす子ども像として「協働して学びを生み出す子ども」の姿を共有することが提案・合意され、研究主題が設定された。

**研究主題 協働して学びを生み出す子どもを育てる**

#### 2. 編成した教育課程の特徴 -幼・小・中12年の連携型一貫カリキュラム開発の6つの柱-

幼・小・中が一貫校として一つの学校になるのではなく、それぞれが独立した学校として教育機能を果たしつつ、連続性をどのように作ることによって子どもの成長・発達を支援していけるかを研究する。以下①～⑥を本校園の特徴ある教育課程として開発を進めた。

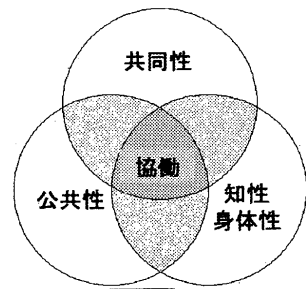
研究構想図 「幼・小・中12年間の学びの適時性と連続性を考えた連携型一貫カリキュラムの研究開発」の研究構想



① めざす子ども像の共有＝「協働して学びを生み出す子ども」、協働を育てる3つの側面

協働とは、他者と関わり、活動し思考するなかで知識（knowledge）技能（skill）の価値を身体を通して知り、それらを磨きながら社会的文化的実践に参加・創造（cultivation）していくことである。

これを子どもたちのみならず教員たちにとっても相似形であてはまる、本校園の教育研究の礎とする。協働の3つの側面（知性身体性・共同性・公共性）を、〈育てる視点〉からこのように考えた。



知性・身体性：主体的で確かな判断や行動を支える身体・感性・知識を育てること  
 共同性：他者と協力して課題を解決していく資質能力を育てること  
 公共性：民主主義に基づく社会生活を創る資質能力を育てること

※「協働」には「共同」「協同」があり、それぞれ類義だが、「共同」は同質性や共通性に焦点があり、一般に「共同体」「共同作業」などと使われる。これに対して「協働」はcollaborateの訳語としてこの字をあてる使い方が増えてきたように、関わり合う者の異質性、その相互作用に焦点がある。また「協同」は「協働」とほぼ同義ともいえる語だが、協働はより作用性、価値に焦点があるのに対して「協同」は行為、組織論的な意味合いが強い。

②『学びの概要』の作成・修正－「適時性」2つの視点から－

ア 子どもたちの発達を長期的視野のなかでみるための「適時性」概念

子どもたち個々の違いに敏感に対応し、それぞれの自己肯定感を高め、健康でバランスのよい心身を育てていくためには、保育や学習のねらいや内容、手だてや教材などを綿密に計画し、注意深く実行し、丁寧なふりかえって、教授－学習の知見を次に活かすことが大切である。plan-do-seeのくりかえしはスパイラルな行為であり、日々の保育、授業レベルにおいて行われるとともに、長期的なカリキュラムレベルにおいても行われる。

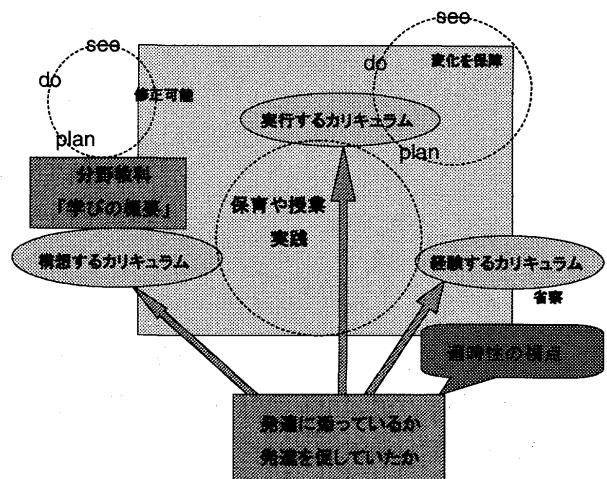
本研究の特徴である「適時性」の概念は、例えば、幼稚園では「ステージ」での考え方に表れている。子どもたちの生活の「ステージ」にふさわしい環境を工夫することで、適時性にかなう実践が可能になる。また、小学校・中学校においても、長期的な視野のなかで子どもたちがいつ何を学習するか構想し、『学びの概要』を作成・修正した。

イ 「発達に添っているか」そして「発達を促していたか」という2つ視点で学びを見つめる

分野・教科ごとの『学びの概要』は、「適時性」概念を適用してブラッシュアップすることにより、「構想するカリキュラム」としての位置づけを明確にした。

今年度は、『学びの概要』を念頭に実践を行い（＝実行するカリキュラム）、実践後にふり返り、学習内容の順序やつながり、ジャンプなど、子どもたちの発達に添っていたか、促していたかと学びの意味を省察した（＝経験するカリキュラム）。

つまり『学びの概要』作成段階において各分野・教科内で各校園の教員達が意見を出しあい、よく話し合ったこと、



および、実践の後に適時性の視点をもって省察し『学びの概要』を修正していること、このような「適時性」概念のカリキュラム作成プロセスでの使い方そのものに、本研究の特徴がある。

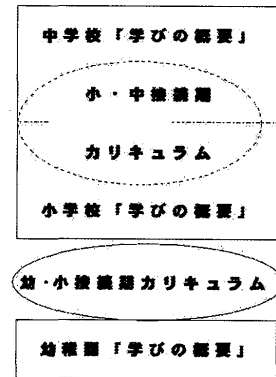
※『学びの概要』という呼称は「H13幼小連携研究」において、計画に基づいて保育・指導を進めつつ、年度の終わりに子どもたちの学びの履歴の総体をカリキュラムと考えようとするカリキュラム観に基づいて、「育てたい資質能力や内容概略」につけられた名称である。

ウ 『学びの概要』2年次版の特徴

－幼稚園／幼・小接続期／小・中学校の3つの部分で提示－

現段階では、本研究で最終的に開発する幼・小・中12年間の教育課程に向かい、「初年度版」をもとに実践しながら、「2年次版」の作成を終えたところである。「初年度版」との大きな変更は次の点である。

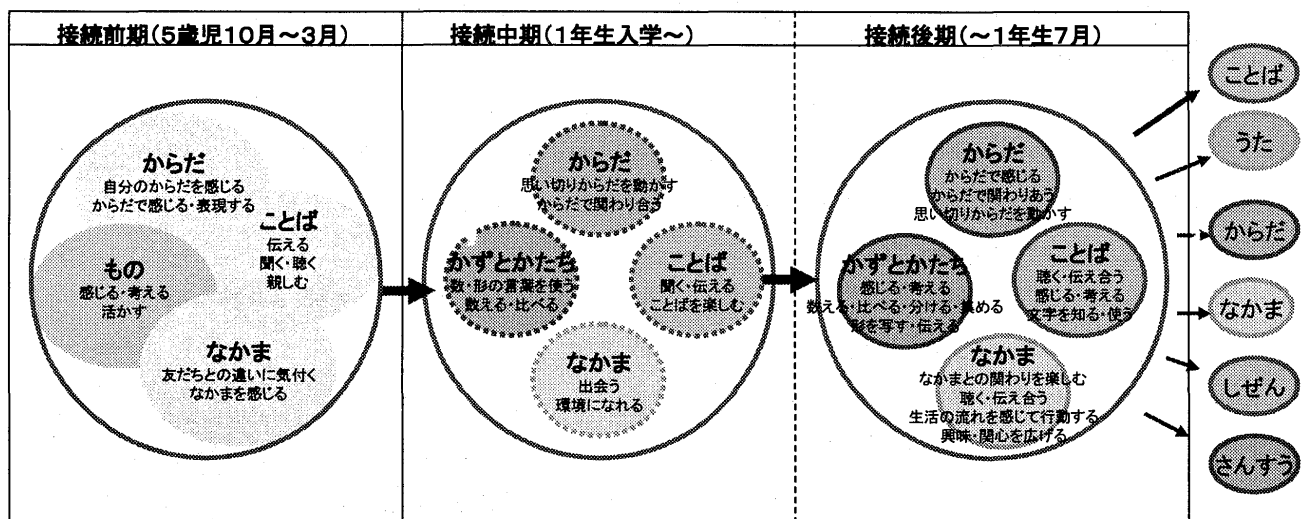
幼・小、小・中の「接続期」に重点をおいた見直しを進めた。幼・小部分は「H13幼小連携研究」の成果をふまえて「幼・小接続期カリキュラム」の形で具体化できた。そこでこれを別記し、『学びの概要』は、【幼稚園】、【幼・小接続期カリキュラム】、【小学校・中学校】3つの部分に分ける形で提示した。



『学びの概要』の小・中部分については、適時性の2つの視点や小・中間の連続性の視点から初年度版に見直しを加え、大きな改訂となった分野・教科もあるが、実践とのすりあわせや省察・検討は途中である。

③ 幼・小接続期カリキュラムの特徴 －協働を生み出す環境－

「なめらかな接続」と「適度な段差」を意識においた今までの連携の積み重ねを活かし、今年度は、「協働を促す環境」に焦点をあてて実践研究を進めた。実践にもとづく幼小接続期カリキュラムの構造を図示すると、このようになる。

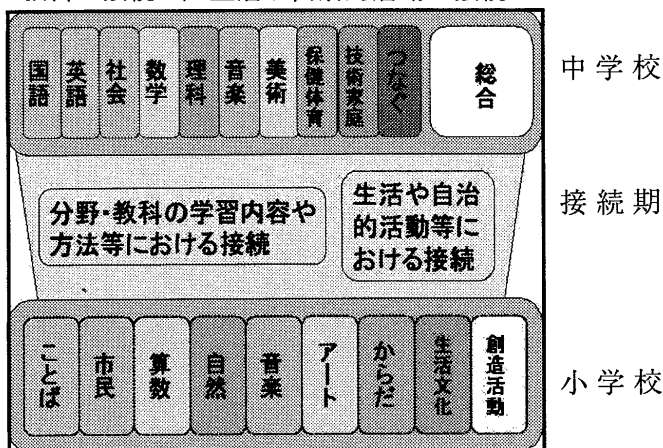


※本研究で使うカリキュラム用語については、幼・小では「保育分野・学習分野」、中では「領域」「教科」の語を用いる。幼・小は、「H13幼小カリキュラム」で開発したものを継続して発展させた。子どもの学びから出発し、既存教科の枠組みを超えて内容や方法を検討していくために「学習分野」という呼称を設定した。一方中学校でも、幼・小と同様に子どもの生活と学びをつないで進めることが大切だが、義務教育の最終段階であることを考え、教科の枠組みを維持している。

④ 小・中接続期カリキュラムの特徴 ー分野・教科の接続と、生活や自治的活動の接続ー

小学校は右図の9つの学習分野、中学校は「教科」「総合」の2領域編成である。

接続期とは、「小・中の教員が、卒業や入学など、人や環境の大きな変化で生じる子どもの不安、とまどい、緊張、葛藤などを、それぞれの子どもの状況に応じて受けとめ、それをもとに、中学校入学の喜びをバネにしたり、小学校での既有経験を生かして解決の見通しをもったりして、安心して中学校での新しい課題にして取り組み、主体的に学習や生活に向かいあう姿勢を育む時期」とした。各時期に重点的に指導する必要があることを検討し、3期（前期・中期・後期）に区切って研究を進めた。



小・中接続【前】期：小学校6年生9月～卒業

小・中接続【中】期：中学校入学～ゴールデンウィーク明け

小・中接続【後】期：ゴールデンウィーク明け～10月中旬（二学期制の「前期」終了時）

⑤ OWNプランによる選択的学習と異年齢交流学習の特徴

ア OWNプランによる選択的学習とは何か

中学校のOWNプランとは、学級枠、学年枠を取り払った子どもの自由選択学習、子どもが自分で時間割を作成できるプログラムで、O=Open, W=When, What, Who N=Need の頭文字を取って命名され、毎年5月に2～3年（2週間）、10月に1年（1週間）、1月に1～3年（2週間、ただし1年生の参加は1週間）行って10年目になる。子どもは必要単位数を計算しながら、自分の興味関心のある講座をとり、事前に計画表を作成して履修する。内容は課題を自分のペースで進めていくものや、グループで活動したり、実験や討論を行ったりするもの、最後にレポートや作品を仕上げるもの、専門の講師を招いての学習会、等々、多岐にわたる。履修する人数も3～4名から40名超まで様々である。

イ 小・中OWNプラン

複数学年が関わりやすいOWNプランに小学生を参加させ、小中の枠を越えた試みを行ったのが本年度のOWNの特徴である。

○5月には、中2～3年OWNを6年生が見学に来た。

○10月には、中1のOWNの期間に、小5生が1人当たり4コマのOWN授業を選択して、2日間の小中合同OWNを行った。それに先立ち、放課後を利用して、小学5年生と中学1年生と一緒に開講科目の説明会に参加した。

⑥中学校新教科「つなぐ科」の特徴ー社会の形成者としての創造的・協働的資質の基礎を養うー

現行「学習指導要領」による中学校の教育課程およびその学習内容は、社会変化の速度に十分対応しきれない部分も出ている。変化する社会に対応できる力を、子どもたちがより確かな力として身につけるためには、総合的な学習の時間として与えられた「時間」を有効に活用する必要がある。平成18年度は、平成17年度の試行を踏まえ、次のような目標を持つ教科として10月から「つなぐ科」をスタートさせた。

目標：変化する社会に対する関心を高め、情報や事象に対し論理的・科学的に思考し判断する能力と態度を育てるとともに、生活や環境についての理解を深め、具体的な活動を通して実践的コミュニケーション能力や、新しい社会の形成者としての創造的・協働的資質の基礎を養う。